

- A Cross-linguistic Perspective,” *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.
- 渡辺明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説』大修館書店, 東京.
- 山田昌裕 (2010) 『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房, 東京.
- Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- 吉村紀子 (1994) 「『が』の問題」『変容する言語文化研究』, 13–28, 静岡県立大学.
- 吉村紀子 (2007) 「「ガ」・「ノ」交替を方言研究に見る」『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ』, 長谷川信子(編), 189–223, ひつじ書房, 東京.

第6章

動詞と格の獲得*

村杉 恵子

南山大学

母語の文法は個々人の脳(心)に実在する。母語の文法は、生得的な普遍文法(UG)と与えられた言語環境(第一次言語入力(Primary Linguistic Data))との相互関係で構築される。

では、日本語を母語とする幼児に与えられる入力に、格に関する情報が豊富にあるのかといえば、実際はそうでもない。

(A) 母: さっき、何見たの? 大きい花火いて、よかったねー。

母は「何見たの?」「大きい花火いて」というように、格助詞(「を」・「が」)は音声化せず、さらに子どもの表現をまねて、「あって」とすべき動詞を「いて」と動詞を間違ったまま繰り返さえて、子どもとの会話を楽しむ。親が直接的な文法格について指導するとは考えにくい事実があるにもかかわらず、幼児は格助詞を自然に習得する。

この習得過程で、日本語を母語とする幼児が、(B)に示すように、大人の動詞形と異なる形式を発話することがある。

(B) ママ、パンツヌイデ(意図: ママ、パンツ脱がして)

* 本章は、橋本知子、富士千里、澤田尚子、中谷友美の各氏との共同研究ならびに拙著『ことばとところ』(2014b)(みみずく舎(発行)、医学評論社(発売))と拙論「生成文法理論に基づく第一言語獲得」(2014a)(『国語研プロジェクトレビュー』Vol. 4, No 3, 国立国語研究所)で発表した内容を含んでおり、また川村知子、宮本陽一、岸本秀樹、藤井友比呂、杉崎敏司、斎藤衛、高橋大厚、高野祐二、瀧田健介、多田浩章、越智正男、奥聡の各氏から貴重なコメント・示唆をいただいている。また、草稿を発表した南山大学言語学研究中心ならびに国立国語研究所における統語論・言語獲得ワークショップの参加者、貴重な観察事実を教えてくださいました柴田和氏、および初稿に対する2名の匿名査読者からも丁寧で有益なコメントをいただいている。ここに深く謝意を表す。なお、この章に関する研究は、南山大学パッパ研究奨励金(I-A)(2015–2016)ならびに科学研究費補助金(基盤研究C: 26370515)によって一部援助を受けている。ここに記して感謝する。

(B) を聞いた母は、文字通りに解釈してパンツを脱いだりはしない。なぜなら、母親は (B) の発話の意図が、パンツを脱がせてくれという使役の要求であることを知っているからである。母親は、言語学者でもないのに幼児が動詞の形式を間違えることがあることを知りつつ、なお、我が子の意図することを理解しつつ子育てをしている。

では、幼児は動詞の形式は誤っても、格付与については間違えないのだろうか。

(C) オドッテン *ノ シンデレラ (踊っているシンデレラ)

この「の」はいったいなんだろう。幼児は属格を過剰生成するのだろうか。それとも、この「の」は属格ではないのだろうか。人は、いつ、どのように、そして、なぜ、母語の格の仕組みを獲得することができるのだろうか。

本章の構成

名詞句は格をもってはじめて、文の中で文法的役割を果たす。では、格はどのように獲得されるのだろうか。

第1部では、格に関わる言語獲得の研究とその理論的な意義について概観する。第1部の前半では、格の獲得に関して、言語獲得の論理的な問題を考えながら、日本語を母語とする幼児の発話に、成人と同質の格に関する知識がどのように発話にあらわれるのかについて整理する。第1部の後半では、日本語を母語とする「幼児の誤用」を代表する2つのケースについて概観する。

第2部では、格の獲得研究が、最近の言語理論の構築に如何に貢献できうるのかについて考えてみたい。ここでは、第3章で概説した主節不定詞現象が格の獲得と生成文法理論(特にミニマリスト理論)にどのように関わりうるのかについて考察を試みる。

なお、本章で取り上げる格の獲得研究と密接に関係した統語分析は越智(本書)と岸本(本書)、またミニマリスト理論における併合とラベリングについては Chomsky (2013) ならびに Saito (2016) にて詳しい議論が展開されているため、そちらと一緒に読んで頂くとより理解が深まるであろう。

第1部 文法格の習得と産出

1. はじめに

人は、母語の格の文法について、等質の知識を持っている。例えば、日本語を母語とする大人は、(1a) に示す「ハンドアウトを渡した」は文法的である

が、(1b) に示す「ハンドアウトが渡した」は非文であることを知っている。

- (1) a. ハンドアウトを渡した
b. *ハンドアウトが渡した

(1) は、ハンドアウトが観客に配布されたという意味であるが、渡したのは「ハンドアウトを」であって、「ハンドアウトが」ではない。「ハンドアウトが」とするならば、述部は「渡った」という自動詞の形式をもった動詞でなければならぬと、日本語の母語話者ならば誰も同じように文法判断をする。母語の中核となる文法に関する知識は、基本的には個人差がなく、母語話者であれば、皆 (1b) は非文であると判断する。

ところが、不思議なことに、実際、それがなぜそうなのかについて、意識して考えているわけではない。したがって、説明することは難しく、母語であるのに、日本語学習者からなぜ (1a) が文法的で、(1b) が非文法的なのかを尋ねられても容易には答えられないのである。ではいったい、大人は、いつ、どのように格についての知識を得るのであろう。

2. 格の獲得に関する論理的問題

格の獲得にもまた、環境から与えられた経験のみによって学習されるとは考えにくい論理的問題が存在する。日本語を母語とする幼児 (I 児, 2歳3ヶ月) と母親との会話をみてみよう。第3章と同様に、カタカナで表記されたものは幼児の発話であり、会話内の「いっちゃん」とは I 児を指している。

- (2) 母: さっき、何見たの?
I 児 (2;03): ハナビ。
母: 花火見たー? きれいだったねえ。
I 児: キレイダッタネ。
母: ね、どうだった?
I 児: ドウダッタ。
母: どうだった?
I 児: ドウダッタ。
母: そっか。
I 児: オッキイハナビ イテ モ ヨカッタ。
母: ねー。大きい花火、いて、よかったねー。
I 児: オバケジャナイヨ。オバケジャナイ。

- 母： おばけじゃないの？
 I 児： ハナビダヨネ。
 母： そう，花火だよねえ。途中で，狼，きた？
 I 児： オオカミ ナイ。イナイ。
 母： おおかみ，いない？
 I 児： イナイ。
 母： よかったね。いっちゃん，狼とお化け，好き？
 I 児： コワイ。

これは，柴田和氏（個人的談話）の記録した，自身（母）と息子との会話である。この穏やかな親子のやり取りは，日本語を母語とする者にとって，実に自然な会話に聞こえる。しかし，実は，この例は幼児の言語経験に関して重要な示唆を含んでいる。

母親の発話に注目してみよう。実は，(2) に示した例は，幼児に現実と与えられる文には，格の表れ方に関する情報がほとんどないことを示している。(3) に示す下線部分は，母親の発話の中で，音声的に具現化されていないと思われる要素の例である。

- (3) a. さっき，何見たの？（さっき，あなたは，何を見たの？）
 b. 花火見たー？（花火を見た？）
 c. どうだった？（花火はどうだった？）
 d. 大きい花火，いて，よかったねー。
 （大きい花火が，あつて，よかったねー。）
 e. 途中で，狼，きた？（途中で，狼が／は きた？）
 f. おおかみ，いない？（狼は，いない？）
 g. いっちゃん，狼とお化け，好き？
 （いっちゃんは，狼とお化けは／が 好き？）

格助詞や代名詞が音声的に具現化されないことに関しては言語学的な理由があるが，そういった理由がいずれ明示的に幼児に与えられるとは考えにくい。さらに，母親の発話には，文法格が具体的にどのように音声化されるのかについてのヒントもほとんど含まれていない。

「はじめに」でも述べたように，一般的に，親は，子どもが発話した内容の真偽については正すことはあっても，子どもが発話した文の形式に関して修正することはあまりないことはよく知られている。ここでも，母親は，我が子の産出した誤った動詞の形（「いた」）を，あえて訂正することもせず繰り返し，

また，談話から推測される主語や目的語といった項も省略している。幼児が与えられる言語経験とは，実は，量的にも質的にも限りのあるものである。にもかかわらず，（付加詞「どう」の疑問文にこそ，答えることができないものの）音声的な格表示のない名詞句を含む文を，幼児（I 児）は理解し，母親との会話を楽しんでいる。

このように，実際の親の発話に格の具体的な情報は必ずしも豊富ではなく，幼児が格のメカニズムを大人の発話を模倣して学んだとは考えにくく，また模倣して学べるほど格のシステムは単純ではない。人が無意識に格のメカニズムを理解しており，なぜ，そうなのかを説明できないという点に鑑みると，格の知識の獲得についても，いわゆる単なる後天的な学習の成果としては考えられないといわざるをえない。

本章では格の獲得について考察する。第3章でも述べたように，理解と産出に見られる差は，格の獲得を考える上でも難しい問題である。例えば(2)において，実際にI児がどのような文法あるいは方略を用いて母親の文を理解しているかは，明確にはわからない。名詞，名詞，動詞という順番にあらわれる文を，主語，目的語，動詞，とする知覚方略（Perceptual Strategy）を用いて解釈しているのかもしれないし，動詞の典型的な特徴に依存して文を理解しているのかもしれない。例えば，冒頭の「何見たの」は，一般に大人の文法では抽象格の「を」が省略できることを知っているのかもしれないが，「見る」主体となるのは典型的には生物（人）であるから，無生物のWH要素である「何」は目的語であるとする方略を用いているのかもしれない。会話が成立しているからといって，幼児が当該の文を理解し，その文に関する文法を獲得しているとは必ずしも論づけられない。

本章では，このようなことにも鑑みて，第3章と同様に，主に産出として音声的にあらわれた格に注目しながら，幼児の文法獲得に関する理論的・実証的研究を概観していくことにしよう。

3. 格に関する縦断的観察研究

縦断的観察による調査は，一般に，その時幼児が何を知っているかを示すことはできても，その時幼児が何を知らないかを明確に示すことが困難である。しかし，複数の異なる幼児を対象とした緻密な縦断的な観察もまた，例えば，格助詞，動詞の活用，そしてその他（WH疑問文獲得など）に関して共通した性質が見いだされる場合，言語獲得の段階を記述し分析する上で，重要な役割を果たすことができる。

文法格の獲得時期についての研究は多いが、第3章に引き続いて、ここでも20世紀後半の国立国語研究所の研究成果として大久保(1967)を例にとって考えてみよう。第3章でも述べたように、節の上位に表れる談話的要素は、格助詞よりも早く発話される。大久保(1967)は、Y児の発話記録から「よ」(例:イヤヨ)や「ね」(例:ソウネ)などの終助詞は1歳7ヶ月までに観察されているにもかかわらず、格助詞は(4)に示すように1歳8ヶ月を過ぎたころからあらわれると観察している。

- (4) a. ココガ イタイ。(1;09)
 b. オメメヲ モツテキテ, オメメ。(1;08)
 c. ヤチヨノ シャシンハ? (1;11)
 d. キューピーチャンガ オカタヲ タタキマシヨウツテ。(1;09)

終助詞「ね」(例:ココモアルネ)や「よ」(例:コワイヨ)が一語文期から二語文期といった早期に観察されることはClancy(1985)にも報告されているが、大久保(1975)もまた、終助詞に比して、格助詞はそれよりも遅い段階で産出にあらわれると観察している。

大久保(1975)によると格助詞が発話にあらわれるのは、WH疑問文が頻繁に産出にあらわれるようになる第一期語獲得期(2歳前後)の頃である。この時期、幼児は「コエ、ナーニ」と質問をするようになり、また格助詞を伴う句も産出されるようになることを指摘している。

- (5) a. オヤマガデキタ
 b. コンドハココ
 c. ココモトケイ
 d. オサカナノオメメ (大久保(1975: 37))

大久保(1975)の観察は、WH語の一部が自然発話にあらわれるようになる時期に、格もまた大人と同様の形式を伴って付与されると言い換えることができる。補文標識(C)に関連する要素があらわれる2歳ごろに、少なくとも時制(T)などの機能範疇に関連する要素(格や動詞の活用)もまた幼児の産出にあらわれることを示唆している。

WH要素の一部(項のWH疑問文)があらわれはじめる頃に格もあらわれるのは、Y児に限ったことではない。例えば、第3章の例文(16)で紹介したI児(2;03)の発話を思い返してみよう。今は持っていないパーシーが、いつかもらえるのだと発話して、母親を驚かせた例である。その4日後のことである。I児のもとに、パーシーとジェームズの機関車のプレゼントが届けられ

た。その時の会話が(6)である。

- (6) 母: プレゼントです。あける?
 I児(2;03): トーマス。
 母: トーマスかな。あけてみようか。
 (郵送された外袋にハサミを入れる)
 I児: パーシー。パーシー。パーシー。
 母: パーシー?ほんとに?じゃあ、ちょっとまってね。
 I児: パーシーガ ハイッテル。
 母: ほんとう?違ったらどうする。
 I児: パーシーガ ハイッテル。
 母: パーシー はいってるかなあ? 他は?
 ... はい、自分で開けるの?...出して、出して。
 わあ、なんかいっぱい入ってるよー!
 ほーら ... あけてみる?
 I児: (紙に包まれたプレゼントを祖母に渡して)
 アケテ。
 祖母: はい、よかったねー。
 かかちゃんにあげてもらって。
 I児: (母が紙に包まれたプレゼントを開けるのを覗き込み)
 ... イロンナーノ、ハイッテ ...
 母: いろんなの、あるよ。
 I児: (パーシーの機関車の箱を指さして)パーシー アッタ。
 母: こっちは?
 I児: ジェームズ アッタ。
 母: ジェームズだー! やったー!

わずか2歳の幼児が、会話の冒頭で、郵送されてきた袋を開ける際、袋の中には「パーシーが入っている」と予測して発話している。一方、袋をあけて実際に彼の予想どおり、パーシーの機関車の箱をみつけたときには、「パーシー、あった」と「が」を省略して発話する。また「ジェームズの貨車」などと属格を含む名詞句も、(6)に続く(7)の自然発話に登場する。

- (7) I児: (ジェームズの箱を祖母に渡して)
 アケテ。
 祖母: あけてね。これあけてあげてください。

- I 児： ジェームズ アケテ、アケテ。
 母： はい。ジェームズがいい？ あけてあげるよ。
 あとで、電池いれてみようね。単3だって...
 ほら、みて。ジェームズ。
 I 児： (ジェームズの貨車を手にとって)
 ジェームズ ノ カシャ。
 母： ジェームズの貨車。
 I 児： (ジェームズの機関車を母親に渡して)
 カカチャン、イレテ。
 母： 電池？
 I 児： デンチ。
 母： ちょっとまってね。
 I 児： (パーシーの機関車を手にとって)
 パーシーダ！

この頃、I 児 (2;03) は第3章で述べた(疑似)主節不定詞現象の段階にはない。動詞の活用のみならず、自動詞と他動詞の区別も明確であり(例：「あけて」「入れて」など)、また項の WH 疑問文に関しても、大人の文法と同様の正用が観察される。(8)は、同時期の I 児が、目的語に関する項の WH 疑問文に関して大人と同じように理解していることを示す例である。

- (8) 母： 起きたら 何するの？
 I 児 (2;03)： オキタラ ... オキタラ パン タベル。
 母： パン食べるの。何のパン食べるの？
 I 児： ブドウパン。
 母： ぶどうパンたべるの。そうかー。
 I 児： ソノトオリダヨ。
 母： そのとおりですか。いいねえ。
 ほかに何パンたべる？
 I 児： ナニパン？ アンパンマンポテト、ミズト
 イッシュニ タベタインダ。
 母： アンパンマンポテトも一緒にたべたいの？
 I 児： タベタイノ。
 母： じゃあ、ぶどうパンとアンパンマンポテトと、
 あと、なにたべる？
 I 児： ムズカシイネ。

- 母： むずかしいね。なににしようか。
 I 児： ウーン、ア、ブルーベリー！
 母： ブルーベリー食べるの？ ブルーベリーはないけど、
 どうしようか？ ね。じゃあ、誰と食べる？
 朝、おきて、ごはんたべるとき誰といっしょにたべる？
 I 児： カカ。
 母： かかちゃんだけでいいの？
 I 児： カカチャンダケデ イイノ。
 母： ああ、わかった。ももちゃんたちは？
 I 児： モモチャンタチ ...
 母： たべないの？
 I 児： タベナイノ。
 母： なんで？
 I 児： ... オバケ、イナクテモ イイヤ。
 母： おばけいなくてもいいや。そっかおやすみ。
 I 児： オバケ、マダ イルノ。

この会話が示す特徴は、前述した大久保の観察内容と矛盾しない。この時期の I 児 (2;03) は、産出において目的語の「を」格を音声化こそしないが、大人と同様の理解を示している。また、「何」や「誰」といった項の WH 疑問文には難なく答えることができる。しかし、「なんで」といった純粹付加詞の WH 疑問文となると答えられない。起きたら何をするのかと尋ねれば、パンを食べると答え、何を食いたいかと尋ねればブルーベリーが食いたいと母の予期せぬ創造的な答えを返し、誰と食いたいかと尋ねれば、母親と食いたいと、母心をくすぐる。しかし、同会話の中で「なんで」他の人と食べないのかを尋ねると、関連のない話題を語り始める。母親であり観察者である柴田和氏(個人的談話)によると「『なんで』の疑問文の意味がわからず、何を話したらいいのかわからないため、思いついたお化けの話をしたのではないかと感じた」という。それは、冒頭に示した(2)の会話で、母親が「どうだった？」と上昇調で尋ねたのに対して「どうだった」と下降調でくりかえして同調することしかできなかった同時期の I 児の様子とも矛盾しない。

発話に格があらわれる頃、動詞は時制を伴ってあらわれ、項の WH 疑問文が「の」や「か」を文末に伴う時期が重なることは、野地(1973-1977)によって観察されたスミハレのデータベースからも裏付けられる。例えば、動詞「来る」は、2歳2ヶ月のころ「来る、来て、来ている、来とる、来てごらん、来

たら、来てちょうだい、来ない、来た」などといった活用形式が生産的に観察されるようになるが、この頃、(9a, b) に示すような主格の「が」もまた生産的に、そして、(9c, d) に示すような目的格の「を」格は随意的に音声化されつつ、WH 疑問文の文末に「の」や「か」が伴われるようになる。

- (9) a. オカアチャン ガ オコッタ (スミハレ 2;02)
 b. ワンワンガ キタ ヨ (スミハレ 2;02)
 c. ナニ タベトル ン? (スミハレ 2;02)
 d. ナニ ヲ カコウ カ? (スミハレ 2;03)

桜の花が、多少の時期のずれはあっても、一斉に春になると咲きほこるように、幼児の格助詞も、また、一定の時期がくると、発話に明示されるようになる。大久保 (1975) の観察は、その格の開花に必要となるのは、時制に関わる構造 (TP あるいは IP) ならびに CP 構造と、大人の句構造において主節は CP であるという知識の獲得であることを示しているようである。

格と疑問に関わる操作といった2つの変数が同時期に獲得されるのか否かは、フィッシャーの直接法や二項検定などの統計によって、より詳細な相関関係の有無を調べることができる。もし、格と WH 疑問文、さらには動詞の時制に関する活用といった時制句に関する要素の出現の時期において、それぞれの間に関連関係があるのならば、それらは同時期に獲得されることを示唆する。そしてそのことは、普遍文法 (UG) の中にこれらの性質を結びつける特性が存在するという仮説に対して、母語獲得から証拠を与えることになる。

4. 幼児の誤用：自動詞と他動詞

本章の冒頭で示したように「ハンドアウトを渡す」と「ハンドアウトが渡る」の違いを日本語母語話者は無意識に知っている。では、「ハンドアウト、渡った」という文は、どういう意図で産出されたのだろうか。それは「ハンドアウトが(皆に)渡った」という意味をもつ文法的な文なのだと解釈されるだろう。それとも「ハンドアウトを渡した」という意味が意図され、動詞「渡した」の代わりに「渡った」という自動詞が誤って用いられたのか。実は、「ハンドアウト」という名詞句がいずれの格助詞を伴う予定で産出されたのかは、この文だけを見ても、曖昧なままである。

「はじめに」でも触れたように、日本語のような動詞の語幹が拘束形態素の性質をもつ膠着語において、述部の形式の獲得に時間がかかることはよく知ら

れている。例えば、大久保 (1975) は幼児の動詞の「誤用」には「ボクガ スレタ (僕が濡らした) (2;03)」や、「カーチャンカラ オカレタ (怒られた) (2;09)」、「チガウ。ボク マダ オボレンノ (覚えられない) (2;10)」などといった誤用があることを指摘している。とりわけ、冒頭の「ボクガ スレタ (僕が濡らした) (2;03)」のような例は、本節の内容に関わる。

日本語を母語とする幼児が、自動詞と他動詞の形式の区別に困難をおぼえる時期があることは、本書でとりあげる幼児の発話においても頻りに観察されている。以下に示すスミハレの例は野地 (1973-1977)、アックンの例は、その母である橋本知子氏による観察 (Murasugi and Hashimoto (2004a)) によって記録されたものである。発話の後に記した () 内はその文の意図された意味を表す。

- (10) a. カアチャン, アイテ
 (おかあさん, ドアを開けて) (スミハレ 2;01)
 b. スイタ, ココ
 (ここから, (これが) ぬけた) (スミハレ 2;01)
 c. トドコッカ, アノヒトニ, トドコウ, トドコウ
 (届けようか, あの人, 届けよう, 届けよう) (アックン 4;08)
 (Cf. Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007))

実は、こういった例は、動詞に時制の活用がみられるようになる2歳より前の、(疑似) 主節不定詞の時期から観察される。例えば第3章で見た下の例がそれにあたる。

- (11) プーワ ツイタ ネ ネ (スミハレ 1;09) (要求, 要望)
 (ろうそくをつけてほしい)

この種の「誤用」は、日本語を母語とする幼児に広く見られ、日本語獲得の中間段階を表す代表的な現象であることは間違いなさだろう。

また、(12a) や (12b) に示すように、使役動詞を使うべきところに他動詞や自動詞が使われている例もある。

- (12) a. クチュ, ハイテ
 (くつをはかせてください) (スミハレ 2;01)
 b. ママ, アックン ノンデ
 (お母さん, アックンに飲ませてください) (アックン 2;08)
 c. ママガ パンチュ スイダ トキ

(お母さんが(私の)パンツを脱がせたとき) (アックン 3;02)
(Cf. Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007))

(12) は観察者によれば使役動詞が意図されて、他動詞「履く」「飲む」「脱ぐ」などが産出されている例である。また、逆に、「ココカラ ヒガ ダスンゼ (スマハレ 2;06)」のように、非対格動詞(陽が出る)であるべきところが、他動詞(陽が出す)で表される場合もある。さて、こういった幼児の「誤用」は親からの「正用」の入力が無いために観察されるのだろうか。その答えは否であることは、「はじめに」でも例示したとおりである。同様の例は他にもある。以下は、長い会話の一部を引用するものであるが、親が否定情報を与えても、幼児はそれをすぐには修正することができない例として興味深い。

- (13) 子ども (3;11): オトウチャン, マド アイテヨ ..
(お父さん, 窓を開けて)
父親: 窓開けてだろ?
子ども: ウン, マド アイテヨ ..
(うん, 窓を開けてよ) (大津 (2002))

(13) では、子どもが父親に窓を開けるように頼んでいるが、子どもは他動詞の「あけて」(開ける)の代わりに、「あいて」(開く)を産出している。ここからも、こういった「誤用」が幼児の自発的な産出であり、親が「正用」を直接的に与えても、一定の時期が来ないと、幼児はすぐには修正できないことがかわれる。

さらに、子どもが自動詞と他動詞を混同するのは日本語特有の現象ではない。例えば英語とポルトガル語においても、使役動詞や他動詞を自動詞で表す誤用が観察されることが、Bowerman (1974) と Figueira (1984) などによって、それぞれ報告されている。

- (14) a. You can drink me the milk
b. (...) este balance vai te cair
this swing go you fall
(This swing is going to fall you...)

(14a) では子どもが母親に牛乳を飲ませてくれるよう頼んでいるが「誤って」自動詞“drink”が使われ、(14b) ではブランコがあなたを「落とす」と意図された状況で「落ちる」に相当する自動詞が使われている。このように、自動詞・他動詞の誤用はさまざまな言語で見られるが、膠着語である日本語は、自

動詞・他動詞の交替が、動詞の語幹に「させ」「せ」「え」などの異なった接尾辞を付けることによって示されることから、子どもの「誤り」が鮮明な形で発話にあらわれる。

先にも述べたように、このような例を見るだけでは、これが項構造の問題なのか動詞の形態的な問題なのかは判断しにくい。なぜ、幼児は自動詞と他動詞を区別することが難しいのだろうか。この問いに対しては主に2つの分析が可能となる。1つは、幼児が、動詞の項について、大人とは異なる構造を仮定しているという可能性である。もう1つは、項構造は大人と異なるものではないが、幼児は自動詞と他動詞の形態を、音声的に区別していないという可能性である。これらの2つの可能性のうち、幼児の獲得段階の実態を説明するのは、後者のようである。

前述したように、この種の動詞の誤用は1歳後半の疑似主節不定詞現象の時期からはじまるが、2歳前後に格助詞が文にあらわれるようになっても観察される。そして、この動詞の「誤用」は、(15)に示すように、幼児の発話意図を正しく反映した格助詞を伴ってあらわれる。

- (15) a. トヲ アイテ (戸をあけて) (スマハレ 2;01)
b. ネエ, アチヲ ヒロガッテ (ねえ, 足を広げて)
(アックン 3;07)

(15) は、項となる名詞句(「戸」, 「足」)が大人と同様の「を」格を伴ってあらわれていることを示している。すなわち、自動詞と他動詞が同形で音声的にあらわれてしまっても、その幼児の仮定する項構造は大人と同様のものであり、したがって、意図された動詞の項に大人と同様の格が付与される。この分析は、大久保 (1975) の観察した「ボクガ ヌレタ (僕が濡らした) (2;03)」において、主語名詞句が主格で標示されている事実と矛盾しない。つまり、この種の誤用は、格のメカニズムの誤用ではなく、動詞の形態的な誤用として考えることができる。

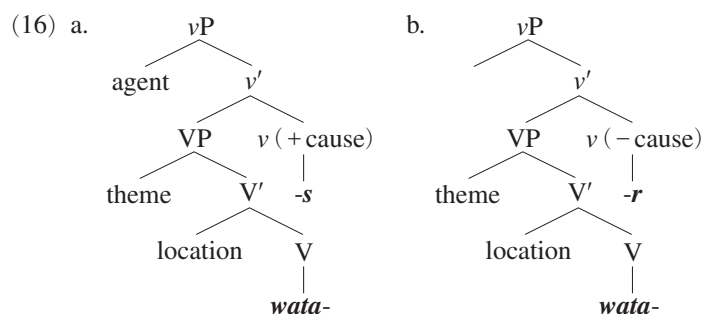
では、なぜ幼児はこのような「誤用」を産出するのだろうか。むしろ、幼児は誤っているつもりはなく、彼らの脳(心)にある文法にしたがっている。したがって、この問いは、幼児はこのとき、大人とどのように異なるシステムをもっているのかと言い換えることができる。

かつて Bowerman (1982) は、英語を母語とする幼児は自動詞を他動詞として用いる (14a) のような例について、これが大人の言語に存在する同一形態の自・他動詞の対 (例えば自動詞 *pass* と他動詞 *pass* の対) に基づいて、自動詞から起因他動詞をゼロ派生させる規則を過剰に一般化して適用するため

あると分析している。Bowerman (1982) の分析は、幼児の動詞の誤用が、自動詞と同一形態の起因他動詞を慣用的な他動詞の代わりに産出する分析として解釈される。その意味で、この洞察は本章の議論からも裏付けられている。

さらに、この種の誤用に関する生成文法理論に基づく分析として、ここでは Murasugi and Hashimoto (2004a) ならびに Murasugi (2012) などによる説明を紹介しておこう。

そこで提案された分析によれば、他動詞と自動詞（非対格動詞）の動詞句の構造として、Larson (1988), Hale and Keyser (1993), Chomsky (1995) に従い、*vP* (small *vP*) と *VP* (large *VP*) の両方を持つ *VP-shell* 構造を仮定している。そして、膠着語特有の（個別に習得される）動詞の接尾辞は *vP* の主要部に相当し、例えば、他動詞「渡す」と自動詞「渡る」の構造はそれぞれ (16a, b) である。(16a) では *v* (+cause) は *-s*, (16b) では *v* (-cause) は *-r* として具現化される。



では、日本語を母語とする幼児は、なぜ、自動詞とすべきものを他動詞に、あるいはその逆に産出するのだろうか。Murasugi and Hashimoto (2004a) などでは、上記の *VP-shell* 分析にもとづけば、(i) (\pm cause) の素性を持つ機能範疇の *v* 自体は、言語獲得早期に獲得されるが、(ii) 幼児が *v* の（大人と同じ形態での）音声的具現化を習得するのに年月がかかるため、(iii) 幼児には自動詞を他動詞として、あるいはその逆に（頻度は低い）他動詞を自動詞として用いる段階がある、とすると、この現象には理論的説明が与えられると分析している。つまり、幼児は *v* の位置には、音声を表示せず、語幹となる *V* (large *V*) にはそのとき知っている動詞（他動詞または自動詞）を入れるために、結果的に自動詞も他動詞も同形になってしまうのである。

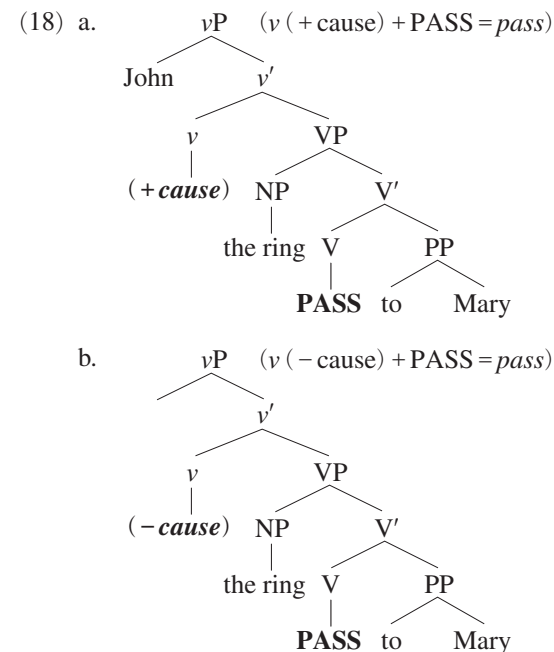
この他動詞と自動詞に関する「誤用」は、表面上区別されない場合がある。先に述べたように、それは自動詞と他動詞が同形の場合である。例えば、英語

では、*lie*（横たわる）と *lay*（横たえる）の対のように、自動詞と他動詞が異なる音形を持つ場合もあるが、(17) に示すように他動詞と自動詞が同じ音形を持つ場合もある。

- (17) a. John **passed** the ring to Mary.
b. The ring **passed** to Mary.

(17a) では、*pass* は、「渡す」に相当する他動詞、(17b) では「渡る」に相当する自動詞として使われている。

これらの項構造を *VP-shell* 構造として表すと (18) のようになる。英語では *v* は音形を持たないゼロ形態素であると分析され、したがって、自動詞と他動詞で音形が同じである。すなわち、(18a) の他動詞では *v* は (+cause), (18b) の自動詞では *v* は (-cause) の素性を持つが、そのいずれもが、音形を伴うことはない。その結果、“*v* (+cause) + PASS” も “*v* (-cause) + PASS” も同形の *pass* として具現化される。



このように考えると、(10) や (11), (12) に示された幼児の「誤り」は、(英語の大人の文法のような) 他動詞と自動詞が同じ音形によってあらわされる言

語の特徴を示すものである。このとき、幼児は自動詞・他動詞の区別を示さず、V (large V) の位置に他動詞形か自動詞形のいずれかの動詞を入れていると考えることができる。日本語にも、「ドアを閉じる」「ドアが閉じる」といった「閉じる」や「そのことを笑った」「膝が笑う」といった「笑う」のように、他動詞と自動詞が同じ音形であられる動詞がある。幼児はこのような動詞を仮定する段階があると考えることができるのである。

この事例は形態レベルの事例ではあるが、次に、文法レベルの事例について、幼児の「誤用」が母語とは異なる言語の文法の特徴を一時的に選択する段階であるとする仮説を見ることにしよう。

5. 幼児の誤用：属格は過剰生成されるのか

幼児の発話には格助詞の誤用が観察されることがある。例えば、2歳頃、幼児は、主語を「の」で標示することがあるが、これは、日本語に限ったことではない。いわゆる主節不定詞現象が随意的にみられる2歳頃の時期に、英語を母語とする幼児もまた、主格を標示すべき主語に、別の格を標示することがある。

- (19) a. モコチャン*ノ ギュウニュウ*ノ ホシインダッテ サ
(もこちゃんが牛乳が欲しいんだってさ.)
(もこ :2;00) (Sawada, Murasugi and Fuji (2010))
b. Her haven't got her glasses (2;09) (Huxley (1970))

このような例については、第2部で議論することにするが、これとは別に、日本語の言語獲得研究で有名な幼児の「誤用」には、「の」の過剰生成に関する問題がある。日本語を母語とする幼児が、1歳頃から4歳頃の間、(20)で示すように「の」を過剰生成することは広く知られている。

- (20) a. アオイ*ノ ブーブー
b. チッチャイ*ノ ブーブー (2;02-2;04) (Clancy (1985))
c. ホワシ オオキイ*ノ ホワシ (大きいお箸) (2;01)
(永野 (1960))
d. マアルイ *ノ ウンチ (2;00) (横山 (1990))
e. ユウタ ガ アションデル*ノ ヤチュ ワ コレ, コレ
(ユウタが遊んでいるやつは、これ、これ)
(ユウタ 2;03) (Murasugi, Nakatani and Fuji (2009))

過剰生成の「の」が何かについては、長く言語獲得研究の謎として議論されてきた。(20a-d)は形容詞と名詞句の間に「の」があらわれる例であり、2歳前後に観察される。(20e)は複合名詞句内に「の」があらわれる例で、2歳から4歳の間観察される。

日本語の大人の文法には、(i) 名詞句内で、名詞的要素あるいは後置詞要素と名詞的要素との間に挿入される属格(例:「山田の本」,「雨の日」,「東京からの電車」), (ii) 英語の *one* に相当する代名詞(例:「赤い^{ミステリー}の」), (iii) 分裂文(Cleft sentences)において前提節の主要部 *that* に相当する補文標識(例:「エミが初めてロブスターを食べたのはボストンでだ」)などが存在する(Murasugi (1991)).

このような大人の文法分析にもとづき、言語獲得研究においても、この過剰生成された「の」について、属格仮説、代名詞仮説、補文標識仮説の3つの仮説が提案されてきた。異なる仮説が乱立する理由の1つには、これらの仮説が依って立つ「誤用」の時期と特徴が異なる点にある。過剰生成が観察される時期は長く、1歳から2歳(永野 (1960) など)とする観察もあれば、4歳ですら見られる(Murasugi (1991) など)とする観察もある。一方、名詞句構造において、所有を意味する属格が必ず音声的に産出にあらわれるようになった時期(2;02-2;04)と過剰生成の時期が一致することを根拠の1つとして、Clancy (1985) は、このときに過剰生成されているのは属格であると提案している。これらの、一見矛盾する記述研究が、実はいずれも妥当である可能性がある。例えば、大久保 (1975: 50) は「オオキイノバター」「アカイノハナ」という発話が幼児の言語獲得の特徴として観察されるが、それは2歳前後からはじまり、4、5歳になっても残っている幼児もいると指摘しているのである。

ここでは、単一の現象に見える「の」の過剰生成が、実は3つの独立した要因にもとづくとする分析を紹介しよう。なお、以下5.1節から5.3節に示された内容は、村杉 (2014a, b) においても紹介されていることを付記する。

5.1. 代名詞仮説

永野 (1960) は、属格の「の」が2歳2ヶ月であらわれ始める前に、(21)に示すように代名詞の「の」があらわれ、同時期に(22)に示すような過剰生成の「の」が観察されるとしている。

- (21) a. オオキイノ (2;01)
b. チッチャイノ (2;01) (永野 (1960))
(22) a. ホワシ オオキイ *ノ ホワシ (お箸). (2;01)

- b. アムナ チッチャイ *ノ アムナ (自分の名前「はるみ」).
(2;01) (永野 (1960))

永野 (1960) の観察では、この「の」の過剰生成の時期に産出されている「の」は代名詞の「の」のみであり、このとき幼児は名詞句構造 (NP の NP) 内で、本来行うべき属格挿入をしない。したがって、この「の」は属格ではないと提案するのである。

この観察が、上記の Clancy (1985) の観察と異なる記述的根拠に基づいている点は興味深い。永野 (1960) では、「の」の過剰生成が、属格はあられず代名詞の「の」しか発話されていない時期に観察されるのだから、これは代名詞であると提案している。一方、Clancy (1985) では、義務的な属格挿入ができるようになった時期に「の」の過剰生成が観察されるがゆえに、この過剰生成された要素は属格であるというのである。

これら2つの提案は、対象とする幼児の獲得段階に関して、その時期も異なっている。永野の観察する「の」は2歳前後であり、このとき、属格は一切あられない。一方、Clancy (1985) の観察する「の」は2歳をすぎ、属格のあられるようになった時期に過剰生成されている。

実は、この2つの提案は、その後、独立した研究から、その両方とも正しい可能性が支持されている。

まず、永野 (1960) の観察と同じ発達過程は、それから40年後の現代の日本語獲得でも橋本知子氏や中谷友美氏などによって観察されている (橋本・村杉 (2004), Murasugi and Hashimoto (2004b), 村杉・橋本 (2006), Murasugi, Nakatani and Fuji (2009) など)。Murasugi, Nakatani and Fuji (2009) ではこのときの「の」を含む発話 (「本, 新しいの, 本だ」(ユウタ 1;10)) を、音声分析ソフトウェア PRAAT (Boersma and Weenink (2009)) を用いて分析し、この時期の「の」の後に明らかなポーズをみとめている。図1に示すように、「の」とその後の指示的名詞の間 (丸で示した部分) に明らかなポーズ (間) がある事が分かる。

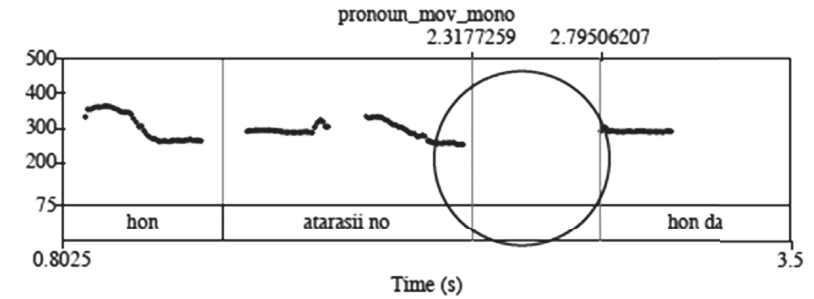


図1

これは、この発話が2つの部分から成り立っている事を示すものであり、2歳以降に観察されるいわゆる複合名詞句内でおきる「の」の過剰生成とは異なる性質を示す。一方、2歳以降で複合名詞句内の補文標識の「の」が過剰生成される (20e) のような場合は、図2に示すように、このようなポーズは見られない。

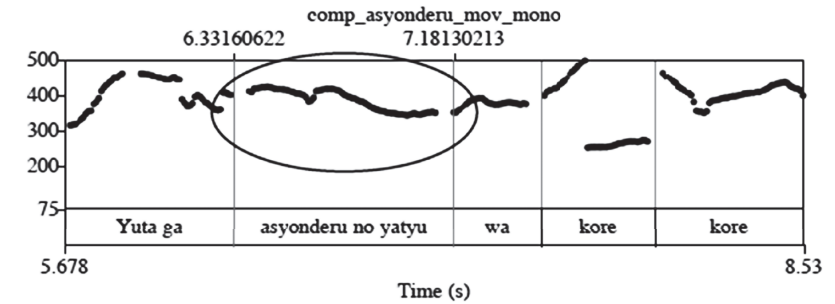


図2

このことから、(22a) では、「おおきいの」が1つのまとまりであり、「おはし」は後付けされていると考えることができる。

そして永野の観察と同様に、このとき、属格が自然発話にあられていないことを考慮すると、1歳から2歳にかけて見られる「の」は代名詞の「の」であるという永野 (1960) の仮説は正しいものであることになる。

では、なぜ、代名詞の「の」があられるのか。一語文から二語文の頃、幼児は「おおきい」と「おはし」の2つの要素を統語的に結合することができないことから、まず「おおきい」の後に軽い代名詞の「の」を添えて名詞句「おおきいの」を設定し、その後に、「おはし」と言い換えて「おおきいの、おはし」とすることで「大きいお箸」という意図を伝えているのだろう。このとき

の「の」の「誤用」は、明らかに文法的要因による過剰生成ではなく、二語文
期前後の子どもの発話上（の結合の限界）の特性と考えることができる。

言語獲得において、一定の語を他の要素と形態的に結合するには時間がか
かると考えられている（Phillips (1996)）。この特徴は、日本語についても言
えることであり、2歳前後の幼児には、「おいしい、ない」（意図：おいしくな
い）などの否定辞「ない」が結合されない発話も見られる。

この「代名詞「の」の誤用」は、要素の結合の未発達な段階において、軽い
名詞句である代名詞の「の」が発話にあらわれる現象であると考えられる。代
名詞が属格や補文標識よりも早くあらわれるのは、それが機能的な要素ではな
く、語彙的な要素であることとも関係するだろう。

5.2. 属格仮説

ところが、上記の代名詞仮説では説明しきれない現象がある。それは、いう
までもなく、Clancy (1985) の観察した事実である。Murasugi, Nakatani and
Fuji (2009) は、Clancy (1985) と同様の事実もまた認められることを報告し
ている。(23) の例は、名詞句構造において属格が義務的に挿入されるよう
になった時期に観察される例である。ユウタの事例は、中谷友美氏が実子につい
て観察した事実 (Murasugi, Nakatani and Fuji (2009) など) である。

- (23) a. アタラシイ*ノ カミ (ユウタ 1;11)
b. シロイ *ノ ゴハン (ユウタ 2;00)
c. チイサイ *ノ ブウブウ トオッタヨ. (スミハレ 1;11)
(Murasugi, Nakatani and Fuji (2009))

この時期、属格の「の」は、「ほくのぶうぶう」といったように、大人の文法と
同様、名詞句と名詞句との間に挿入されている。さらに、Murasugi, Nakatani
and Fuji (2009) は、PRAAT による分析から、代名詞の場合とは異なり、こ
のときの「の」と名詞句の間には、図3に見るように、間（ポーズ）はないこ
とを確認している。(23b) の例を見てみよう。

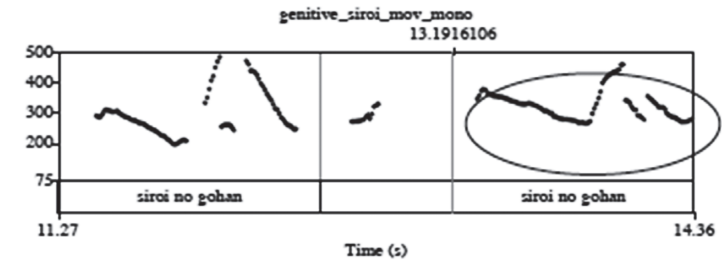


図3

ここでは「シロイノゴハン（白のご飯）」が一定の構成素として発話されてい
ることから、上に示した代名詞の「の」の場合とは異なることは明らかである。

一方、この段階では、複合名詞句や分裂文も観察されないため、この「の」
が、5.3節で述べるような補文標識である可能性も考えにくい。

この時期の過剰生成の「の」について、横山 (1990) が興味深い観察結果を
報告している。それは、この時期の過剰生成は、すべての形容詞において観察
されるのではなく、色、大きさ、形状などの形容詞（「赤い」、「大きい」、「黄
色い」、「黒い」、「小さい」、「でっかい」など）とのみ共起するというのである。

この一見奇妙な事実が、記述的に妥当であることを Murasugi, Nakatani
and Fuji (2009) は中谷友美氏による縦断的観察研究と野地 (1973-1977) の
観察したスミハレのデータベースの分析に基づいて示している。横山 (1990)
の観察内容と基本的には同様に、大きさ、形状などの特定の形容詞が使われる
とき、この種の「の」の「過剰生成」が見られ、一方、「おいしい」「ばばちい
（汚い）」「痛い」などの形容詞は叙述的に用いられ、「の」の「過剰生成」は見
られない。

- (24) a. オイシイ、コレ。 オイシイ、コレ。 (ユウタ 1;10)
b. ココ ババチイ ヨネ。 (スミハレ 2;00)
c. オカアチャン ポンポ（胃） イタイ ノ？ (スミハレ 2;00)
(Murasugi, Nakatani and Fuji (2009))

この観察にもとづき、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009) は、なぜこのよ
うな一般化が見られるのかを問い、幼児が「形容詞」を大人とは異なる範疇と
して捉えている段階があるとする分析を提案している。子どもは、色、大き
さ、形状のような名詞の形容詞は名詞として捉え、属格の「の」を挿入する。
一方、それ以外の動詞の形容詞は、動詞として捉え、これらには属格の「の」
が「誤って」あらわれることはない。

この仮説の妥当性は、名詞的形容詞の過去形が現在形よりも遅くあらわれるのに対し、動詞的形容詞の過去形は早くから産出にあらわれることから示される。表1は「ユウタ」の発話、表2は「スミハレ」の発話を示すものであるが、ここに示すように、名詞的形容詞の過去形が極めて遅くあらわれるのに対し、動詞的形容詞の過去形は比較的早くあらわれる。

名詞的形容詞 (触覚, 視覚に関するもの)			動詞的形容詞		
形容詞	現在形	過去形	形容詞	現在形	過去形
大きい	大きい (1;08)	大きかった (2;00)	痛い	痛い (1;11)	痛かった (1;11)
黒い	黒い (2;00)	黒かった (2;04)	おいしい	おいしい (1;10)	おいしかった (1;10)

表1: 形容詞の現在形・過去形があらわれ始めた年齢 (ユウタ)

名詞的形容詞 (触覚, 視覚に関するもの)			動詞的形容詞		
形容詞	現在形	過去形	形容詞	現在形	過去形
大きい	大きい (1;11)	大きかった (2;09)	痛い	痛い (1;08)	痛かった (2;00)
赤い	赤い (1;11)	赤かった (4;00)	重い	重い (1;08)	重かった (2;02)

表2: 形容詞の現在形・過去形があらわれ始めた年齢 (スミハレ)
(Murasugi, Nakatani and Fuji (2009))

色, 大きさ, 形状のような名詞的形容詞が名詞として捉えられる段階があると考えられる根拠としては, それらが指示的名詞として, 項の位置に (時に格を伴って) あらわれることがあげられる。

- (25) a. *キイロイ ト *アカイ ト (スミハレ 2;09)
b. *チイサイ コオテ (買って) ヤ (スミハレ 2;07)

- (26) *チッチャイ ガ アッテ, *マアルイガ アッテ, ...コンナ
オオキイガ アッテ, ... (ユウタ 2;02)

(Murasugi, Nakatani and Fuji (2009))

(25a) の形容詞「黄色い」「赤い」はそれぞれ「黄色いクレヨン」「赤いクレヨ

ン」, (25b) の「小さい」は、「小さい犬」を指している。(26) では形容詞に直接主格「が」が付与され, 主語として振る舞っている。

日本語を母語とする幼児にとって, 「形容詞」は難しい要素であり, 幼児は, 形容詞を名詞 (的要素) か動詞 (的要素) かのいずれかの範疇として統語的に誤って扱う段階を経るようである。2歳前後に一定の「形容詞」にのみ「の」の過剰生成が見られる現象は, その時期, 幼児が, 色, 大きさ, 形状などに関係する意味をもつ形容詞について, それを統語的には名詞として扱うため, 結果的にその種の「(大人にとっての) 形容詞」は一般の名詞句と同様に属格が付与されるものと考えられる。一方, 動詞的な形容詞は, 動詞的であるがゆえに, この時期には連体用法 (関係節のような構造) としては産出されない。

したがって, 横山 (1990) の記述的一般化は, この段階の不思議な「の」は形容詞という統語範疇の獲得の困難さによって属格が挿入された所以であると再分析される。

色, 大きさ, 形状を表す形容詞は, 他の情緒的, 評価的な形容詞と異なり, 具体名詞に通ずる特徴を持つという指摘がなされている (Berman (1988), Mintz and Gleitman (2002)). また de Villiers and de Villiers (1978) は, 子どもは, 色, 大きさ, 形状を表す形容詞を1つのグループとして捉えていると論ずる。さらに, 形容詞は「流動的範疇」とされ, 習得が難しいとする論もある (Gasser and Smith (1998), Berman (1988), Polinsky (2005) など)。このような観察から, 上記の形容詞は名詞的要素として認識されている可能性がある。実際, 日本語の形容詞は名詞と同様「です」の前にあらわれ, 一方では動詞と同様に時制を伴い活用することから, 形容詞としての統語的手がかりは, 肯定情報において明確ではない。

このように考えると, 形容詞に不要な「の」が後続するのは, 属格が「過剰生成」されているわけではない。大人の文法では形容詞とされる範疇が, 幼児には名詞として扱われ, 属格は大人の文法どおりに名詞的な要素の間に挿入されているのである。したがって, 属格の「の」があらわれる「誤用」は, 属格が過剰に生成されているのではなく, むしろ, 名詞句構造の中で属格の「の」が名詞的要素の間に「正しく」挿入されていると考えてよいだろう。

5.3. 補文標識仮説: 連体修飾節構造のパラメータ (Murasugi (1991))

2歳半ばごろになると, 幼児の発話には連体修飾部として関係節がみられるようになるが, このとき, 「の」は関係節にも過剰生成されるようになる。

連体修飾部が関係節の場合にも「の」の過剰生成が起こることをはじめて記述したのは, 著者の知る限り, Harada (1980) である。そこでは「カイジュウ

ニナッタノオンナノコ」「ウサチャンガタベタノニンジン」といった例をとり、連体修飾部が関係節の場合にも「の」の過剰生成が認められることが示されている。こういった「誤用」も、前述したように修飾部の後に属格の「の」の挿入が過度に一般化された結果であるとする説明が多くなされてきた (Harada (1980), Clancy (1985))。

しかし、先に簡単に触れたように、同じ「の」が2歳から4歳頃の子どもに同じ理由で過剰生成され続けるということは考えにくい。また、主語名詞句に主格が付与され、連体修飾節内の動詞も時制を伴っている文が、なぜ属格を付与されるのかについても説明が必要である。いったい、この「の」は何で、そして、それはなぜ過剰生成されるのだろうか。

関係節などの埋め込み構造を獲得したあとに過剰生成される「の」について、原理とパラメータ理論の枠組みで、それが補文標識 (C) であり、この種の過剰生成は世界の言語の連体修飾節構造の多様性から生じるとする提案がある (Murasugi (1991))。本節ではこの提案を簡単に紹介しよう。

「はじめに」ならびに杉崎 (本書) にも詳細に紹介されているように、原理とパラメータ理論では、普遍文法 (UG) は人間言語に共通の原理の体系として規定され、それらの原理の多くには少数の値を担うパラメータがあると考えられている。幼児は、言語獲得の過程で、母語のパラメータの値を決定するが、その決定には時間がかかることがある。Murasugi (1991) は、関係節を含む複合名詞句の構造もパラメータの一部であると考えている。そのパラメータにはその値として補文標識の有無があり、多くの言語では関係節は補文標識 (英語では *that*) を含む CP 構造をもつが、日本語や韓国語は補文標識 (*that*) を欠いた TP 構造をもつと提案している。そのような言語では、理由や方法を修飾する関係節の長距離の解釈が不可能である。すなわち、「[太郎が [花子が問題を解いたと] 言った] 方法」は非文法的であり、「花子が問題を解いた方法」という解釈はできない。これは、英語のような言語において “[the way [that John said [that Mary solved that problem]]]” が Mary の問題を解いた方法という解釈を許すという事実と好対照をなす。すなわち、関係節において補文標識をもたない言語は長距離解釈を許さず、補文標識をもつ言語は長距離解釈を許す。このことは、日本語のような TP 構造の修飾句は付加詞であり、英語のような関係節の構造を持たないことを示している。そして、日本語を母語とする幼児は名詞句の中で文が埋め込まれるとき、その構造のデフォルトとして CP 構造を仮定し、したがって、補文標識の「の」の過剰生成が観察されると説明する。

その時期の発話を示す例を再掲しよう。

- (27) a. イジワルナ *ノ オバチャン
(意地悪なおばちゃん, シンデレラの継母)
b. チガウ *ノ オウチ ((引越しをした) 違う家)
c. オドッテル *ノ シンデレラ (踊っているシンデレラ)
d. ゴハン タベテル *ノ バーバ
(ごはんを食べている象のババー)
e. パパガ カイタ *ノ タコノエ (パパが描いた蛸の絵)
f. シュークリームツクッテル *ノ ニオイ
(シュークリームを作っている匂い)

(以上2歳~3歳)

このパラダイムが示すように、この時期の「の」の過剰生成は、形容詞のみならず、形容動詞 (27a), 動詞 (27b), 関係節 (27c-e), そして、純粹複合名詞句 (27f) などに広く観察される。この時期には、形容詞についても「クロイ *ノ クック」(黒いくつ) などの過剰生成が観察される。しかし、関係節の構造の獲得と形容詞の範疇の獲得の時期については、それぞれに関する「の」の過剰生成の消える時期が、同一の幼児において異なることがあること (Murasugi (1991)) から、形容詞の範疇の獲得と関係節の構造の獲得の問題は独立した問題であると考えるのが自然である。

この「の」が補文標識であるとする仮説の根拠の1つは、富山方言や韓国語の事実から得られている。富山方言の大人の文法では補文標識は「が」、属格は「の」であり、韓国語では補文標識は *kes*, 属格は *uy* である。そして富山方言、韓国語を母語とする幼児に過剰生成されるのは、それぞれ、補文標識の「が」と *kes* である。

- (28) a. アンパンマン ツイトル *ガ コップ.
(富山方言, ケン2;11) (Murasugi (1991))
b. Accessi otopai tha-nun *kes soli ya.
uncle mortorcycle rinding-is KES sound is
'Lit. (This) is the sound that a man is riding a motorcycle.'
(おじさんがオートバイに乗っている音だ..)
(韓国語, 2~3歳) (Kim (1987))

属格は、富山方言では「の」、韓国語では *uy* であることから、ここで過剰生成されている要素「が」と *kes* は属格ではありえない。

また、この段階の幼児は「(名詞(的要素) 山) の (名詞(的要素) お花)」といったように

名詞(的要素)と名詞(的要素)の間に属格の「の」を大人と同様に挿入できていることから、もし、この「が」が代名詞であるとしたときには、「^{(名詞(的要素))}... *が」の^{(名詞(的要素))}...」という形式の発話が予測される。しかし、実際には、富山方言を母語とする幼児は「アンパンマン付いとる *が の コップ」(^{(名詞(的要素))}アンパンマン 付いとる *が)の^{(名詞(的要素))}コップ))という名詞句を産出しない。したがって、関係節を産出するようになった2歳中盤ごろから過剰生成する「の」(富山方言では「が」)は、補文標識であると考えられる。これは、英語の連体修飾節において *the carrot that the rabbit is eating* で使われる *that* に対応し、したがって、日本語話者の幼児は、この時期、(語順は異なるが)英語と同じ連体修飾節の構造を仮定していることになる。

なぜ、日本語を母語とする幼児は、連体修飾節の構造として英語のような文法を仮定するのだろうか。先に述べたように、それは世界の言語の連体修飾節構造の多様性から生じると考えられる。世界の言語の中で、連体修飾節(関係節)の構造に関するパラメータには2つの可能な値がある。1つは日本語や韓国語のようにいわゆる関係代名詞を持たない値を選ぶ言語、いま1つは英語のようにいわゆる関係代名詞(*that*)を持つ値を選ぶ言語である。

前述したように、言語の特徴として、関係節を導入する *that* は、一般に分裂文の前提節の導入にも用いられる。したがって、*It is in Boston that I ate the lobster for the first time* 「ロブスターを初めて食べたのはボストンでだ」というような分裂文においても、*that* (英語)や「の」(日本語)があらわれる。この分裂文と関係節についての特徴を無意識の文法知識として知っている幼児(2歳から4歳頃)は、「ウサチャンタベテル*ノニンジン」というように補文標識の「の」を過剰生成する。これが英語と同じ連体修飾節の構造を仮定している日本語の「の」の「誤用」の段階であると考えられる。

この「誤用」は、連体修飾節構造に関するパラメータに関しては英語タイプの値がデフォルトであることを示している。幼児は、どのような言語をも獲得できるように生まれついており、日本語や韓国語を母語とする幼児は、連体修飾節構造については、最初にデフォルトである英語のようなCP構造の値を仮定する可能性がある。

5.4. 「の」の誤用のまとめと過剰生成の特徴

これまでの論をまとめると、いわゆる「の」の誤用は、(i) 代名詞(1歳後半)(5.1節)、(ii) 属格(2歳前後)(5.2節)、(iii) 補文標識(2歳~4歳)(5.3節)、の3つの段階を含み、過去に提案されてきた仮説は、それぞれの段階を対象としたものであり、基本的にすべて正しいと言えるだろう。これらの

中で言語理論上「過剰生成」と言えるのは、(iii)の場合、すなわち連体修飾節構造のパラメータの設定による補文標識の場合のみである。それ以外の「の」は、語の結合操作や形容詞の統語範疇の獲得の難しさに起因し、「の」そのものとしては、大人の代名詞ならびに属格とその性質において齟齬がないものと考えられる。

過剰生成は、一般的に、U字形を描くといわれている。まず、幼児の発話には大人と同じ形式があらわれ、過剰生成の過程を経て、大人の形式が獲得される。すなわち、当初は、限られた要素について、(分割できないまとまりとして発話するために)大人と同じ形式があらわれるが、次に、そのまとまりが分割され、一定の「規則」に基づき生産的な過剰生成が観察され、その後大人の文法へと至る。英語を母語とする幼児が *go* の過去形である *went* を表現するようになる段階を思い起こしてみよう。大人の形式と同じ *went* を発話した後に、*goed* あるいは *wented* というように *ed* が過剰生成された形式を産出し、その後大人の形式に至るのが、U字型過剰生成の典型的な例である。

日本語を母語とする幼児においても、U字形の過剰生成は、使役形(例: 渋谷(1994), 荒井(2006), Murasugi and Hashimoto(2004a), Murasugi, Hashimoto and Fuji(2007))や可能表現(例: 渋谷(1994), 荒井(2006), Yano(2007), Fuji, Hashimoto and Murasugi(2009))などにおいて、多く報告されている。

例えば、可能表現において、渋谷(1994)は、国立国語研究所の纏めたコーパスに基づき、以下に示すように、(29b)に示すような過剰生成が始まる前に、幼児「たあちゃん」が大人と同じ形式(29a)を発話してことを報告している。

- (29) a. トオレル (2;01)
b. デキラレナイ (3;07)

さらに、U字形の過剰生成は形態的なレベルにとどまらない。橋本知子氏は、自身の子どもアックンを縦断的に観察する中で、連体修飾節のような文法レベルにおいても見られ、連体修飾節における「の」の過剰生成に関わる習得もまた、U字形を描くことを観察している(橋本・村杉(2004))。

アックンの自然発話において初めて連体修飾節があらわれたのは、(30)のような例である。「買った」を修飾節としてもつ(疑似)関係節のみであり、その連体修飾節には「の」は全く過剰生成されていなかった。

- (30) a. ナンナンナー、カッタ オットット (アックン 2;06)

(おでかけをして買った魚)

- b. パパ カッタ ダンゴ オイチイ (アックン 2;06)
(パパが買ってくる団子がほしい) (橋本・村杉 (2004))

ところが、その一か月後、アックンは、多くの連体修飾節に、生産的に、「の」を過剰生成するようになったのである。

- (31) a. カッタ *ノ ケーキ (アックン 2;06)
(買ったケーキ)
b. パパ カッタ *ノ オチェンベイ オイチイ (アックン 2;06)
(パパが買ってくるお煎餅がおいしい)
c. ペンギンチャン チュイテル *ノ カバン (アックン 2;09)
(ペンギンの絵がついたカバン)
d. イマ, パパガ イレタ *ノ オットット ドコ (アックン 2;10)
(今, パパが入れた鑑賞魚は, どこにいるの?)
(橋本・村杉 (2004))

過剰生成がU字形を示すという特徴は、言語発達が小さな要素を単純に積み上げる過程ではないことを示唆する。言語獲得とは、意味的音声的に分割できないまとまりが、徐々に分割されていく過程を含んでいる。そしてそれは語のレベルにおいてのみではなく、句のレベルでも同様にみられるようである。

過去60年にわたって議論されてきた「の」の過剰生成の問題は、記述においてすら矛盾を孕む混乱の中にもあったが、その問題の根幹には、この過剰生成が単独の現象と信じられていたことがある。また、日本語の東京方言のみを研究対象としたこと、この「の」が何かのみに焦点があてられて、なぜ「の」が過剰生成されるかは問われない傾向にあったことも、議論の原因であると言えるだろう。

それは何か(“what” question)、どう獲得されるか(“how” question)という問いのみならず、なぜそうなのか(“why” question)を問い、一定の基準のもとで他言語と比較検討するとき、人のここらにある文法の重要な特性が、日本語の「の」からも明らかになる。

第2部 格と併合

第1部では、格助詞に関わる言語獲得の研究を整理し、その理論的な意義

について概観した。第2部では、格の獲得研究が最近の言語理論の構築にどのように貢献できるのかについて考えてみたい。

先に述べたように、幼児の発話には格助詞の誤用が観察されることがある。(疑似)主節不定詞現象には、(日本語のような言語を獲得する)幼児が一定の動詞形式のみを産出する1歳代とは別に、(英語のような言語を獲得する)幼児が2歳代に主節内で不定詞形と正用の定形動詞を随意的に発話する段階がある。後者の主節不定詞現象は2歳代に観察され、随意的不定詞現象(Optional Infinitives)と呼ばれている。この時期、(19)でも見たように、英語を母語とする幼児は、主格を標示すべき主語に、別の格を標示することがある。そして2歳頃の日本語を獲得する幼児もまた、主語を「の」で標示することがある。(32)にその例をもう一度みてみよう。

- (32) a. Her haven't got her glasses (2;09) (Huxley (1970))
b. モコちゃん*ノ ギュウニユウ*ノ ホシインダッテ サ
(もこちゃんが牛乳が欲しいんだってさ。) (モコ 2;00)
(Sawada, Murasugi and Fuji (2010))

いったい、この「誤った」属格主語は、いつ、どのように、そしてなぜおきるのか。1つの仮説としてSawada, Murasugi and Fuji (2010)の分析を参照されたいが、本節では、そこで分析を踏まえつつ、ミニマリスト理論との関連から、再考してみよう。

生成文法の発展の中で提案されているミニマリスト理論において、格は中核的な位置づけを占めている。人間は、生得的に与えられた文法知識(普遍文法)として併合(merge)とラベリング(labeling)を持つと仮定され、併合は、ラベリングを、ラベリングは ϕ 素性一致(ϕ -feature agreement)を、そして ϕ 素性一致は格を要求する。

- (33) Merge \rightarrow Labeling $\rightarrow \phi$ -feature agreement \rightarrow Case (Saito (2016))

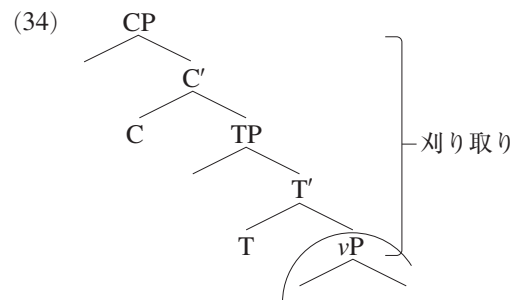
(33)は、 α と β が併合するためには、ラベリングが必要であり、ラベリングがなされるためには、 ϕ 素性の一致が必要であり、 ϕ 素性の一致をするためには格が必要となることを示すアルゴリズムである。(詳細は、Chomsky (2013)、斎藤 (2013)、Saito (2016)などを参照されたい。)

こういったミニマリスト理論に基づいた文法研究において、第3章で概説した(疑似)主節不定詞現象の問題は重要なヒントを与える可能性がある。幼児の格の獲得段階にみられる正用と誤用は、幼児がなぜ随意的不定詞の段階を経るのかという問いと深く関与している可能性がある。

1. (疑似) 主節不定詞と格

第3章の第2部で詳細に述べたように、(疑似) 主節不定詞現象は、広く多くの言語において、初期の言語獲得段階に観察される。その形態的なあらわれかたは、言語によって異なる。フランス語やドイツ語、オランダ語のような言語では主節に不定詞があらわれるが、英語のような語幹が独立できる動詞を持つ言語では裸動詞が、そして日本語のように動詞の語幹が拘束形態素の性質を持つ言語では一定の活用を伴った代理形が典型的に主節不定詞としてあらわれる。すなわち、すべての言語で、すべての幼児が、いわゆる不定詞という形式でもって、初期の動詞をあらわすわけではなく、その形式には、当該言語の形態的特徴が色濃く反映される。このことは、わずか1歳後半の幼児でも、当該言語の語順のみならず、獲得しようとしている母語の動詞の形態的特徴も知っていることを示している。(第3章で引用した文献を参照されたい。)

形態的には異なった形式で顕在化する3種類の「(疑似) 主節不定詞」には、一定の共通した特徴がある。それは、第3章で述べたように、時制や補文標識に関連した特徴が大人の文法とは異なるという特徴を含んでいる。その特徴を説明するために、Rizzi (1993-1994) は、主節不定詞の時期の幼児の文構造が大人のそれとは異なる可能性を示唆している。それは、大人の文構造がCP構造を持っているのに対し、主節不定詞の段階にある幼児は、TPより下の投射で止まる(刈り取ってしまう)構造を許すという仮説で、切り取り仮説(Truncation Hypothesis)と称されている。大人の文構造(CP構造)とは異なり、幼児は、途中までの投射で止まる(刈り取ってしまう)構造(vP構造)を許すという仮説である。



この仮説は、主節不定詞現象の観察される時期に、疑問文(C要素に関する項目)や助動詞(T要素に関する項目)が、主節不定詞と共にあらわれず、また空主語が多くあらわれる事実も統一的に説明する。

しかし、(疑似) 主節不定詞現象を詳細に検討すると、それにはさらに2つの段階があることがわかる。1歳代のそれは、日本語のような言語においてはすべての動詞が一定の代理形式(例えば「-た」形や、裸のオノマトベなど)を伴ってあらわれ、このとき、格もWH疑問文も(疑似) 主節不定詞とは共起しない。ところが2歳をすぎると、日本語を母語とする幼児は、動詞の活用を大人と同様に用い始める。一方、英語を母語とする幼児は、2歳を過ぎてもなお、主節の動詞として、時には不定形を、時には大人と同様に定形を用いる。このとき、動詞の定形が主節に随意的にあらわれることから、この時期は随意的不定詞(Optional Infinitive)とも称される。

ここで注目すべき点は、日本語の(疑似) 主節不定詞は、代表的には動詞の「た」形、ならびに時にオノマトベや「て」形であられるが、これは1歳後半に典型的にみられており、2歳を過ぎると、幼児の動詞の活用は豊かになることである(Murasugi, Fuji and Hashimoto (2010)をはじめ、第3章で紹介した文献、ならびにを参照されたい)。例えば、Sano (1995) が詳細に調査したように、2歳代の幼児については、英語で観察されるような随意的不定詞は、少なくとも動詞の活用形としては観察されない。日本語の動詞の形態を見る限り、日本語を母語とする幼児において、英語などの言語話者とは異なり、2歳を過ぎた時期には随意的不定詞の段階は観察されない。

ところが、同時期、(32)にみたように、主語名詞句に「誤って」属格が付与されるという点において、そのあらわれかたの頻度や時期の長さには違いはあるものの、日英語は共通する特徴を示すのである。いったいなぜ「誤った」属格主語が、英語において、しばしば2歳頃に観察されるのだろうか。

この随意的不定詞の観察される時期について、幼児が、時制や一致などのφ素性一致(φ-feature agreement)に関して、大人とは異なるメカニズムもつとする提案がある。例えば、Schütze and Wexler (1996) は、随意不定詞の段階にある幼児は、文構造としてIP (inflectional phrase) を持っているがI (inflection) の担う素性 (agreement/tense) の指定が不十分な段階にあり、AGR, あるいはTNSを欠く(“Omit”する)可能性があることを指摘する。この仮説はAGR/TNS Omission Model (ATOM)と称されている。

英語を母語とする幼児の発話において、主節の動詞が定型動詞の場合には、大人の文法と同様に主格が主語の名詞句に与えられるが、主節に不定詞があらわれるときには、主語の名詞句には主格以外の格が標示される特徴が観察されている。こういった言語獲得の事実についても、このATOMのモデルは、定型動詞はVP内からINFLへと上昇する一方で、非定型動詞は、上昇しないという理論的仮説を基礎として自然な説明を与えることができる。

すなわち、英語を母語とする幼児は、2歳以降も動詞の形態として随意的不定詞現象を示し、そのとき、幼児は、格標示においても大人の文法とは異なるメカニズムをもつ。幼児は、随意的に主節に（大人の文法からみれば「誤用」である）不定詞を用い、このとき主格を与えられるべき主語もまた、大人の文法では許されない属格や与格などを伴って表す。幼児は、時制や一致に関して重要な役割を果たす文構造をもちながら、それらに関する素性に関して、大人とは異なる文法をもつがために、文の主語名詞句が、主格ではない「誤った」格を伴う（例えば *My do it, *Me want it などのように）文を産出する。具体的には、例えば IP の主要部が [-agreement, -tense] の素性を持つ場合には属格主語が、[-agreement, +tense] の場合には与格主語があらわれる。

ATOM の仮説をミニマリスト理論のもとで捉えなおせば、それは、母語を獲得する2歳頃、幼児には ϕ 素性一致 (ϕ -feature agreement) のメカニズムを随意的に機能させる段階があることを提案するものと言い換えることができるだろう。

もし主節不定詞現象を示す段階にある幼児が、時制や一致に関する ϕ 素性一致のメカニズムについて、母語のそれと異なる段階にあるとすれば、それは、どのようなもので、また、いったいなぜそのような段階が存在するのか。この段階は、英語を母語とする幼児が、いわゆる ϕ 素性一致を欠く言語、すなわち、日本語のような言語の文法をもっていることを示唆するのであろうか。

2. 格表示と随意移動

ミニマリズム理論において、 ϕ 素性一致 (ϕ -feature agreement) は、ラベリングを行う上で重要な役割を果たす。Chomsky (2013) の提唱するラベリングのメカニズムは、 ϕ 素性の一致により可能になることから、 ϕ 素性の一致はラベリングにおいて不可欠となる。一方で、大人の文法の問題として、 ϕ 素性一致を持たないと考えられる言語では、そもそも、併合と、併合によって形成される構成素のラベリングはどのようになされるのだろうか。

Saito (2013, 2016) は、日本語のようなスクランプリングや多重主語を許し、また文法格や空項、そして複合動詞を豊かにもつ言語に注目し、この問いについての分析を提示している。本来、併合は自由であるにもかかわらず、多重主語やスクランプリングのような併合は、限られた言語にのみ許されるのはなぜなのか。Saito (2013, 2016) は、その理由として文法格 (suffixal Case) がラベリングのアルゴリズムにおいて重要な役割を果たすためであると提案している。具体的には、文法格 (suffixal Case) がラベリングをするための構成

素を不可視化し、したがって、日本語のような文法格の豊かな言語において多重主語やスクランプリングなどの併合が可能になるという提案である。（詳細は Saito (2013, 2015) を参照。）

英語を母語とする随意的不定詞の段階にある幼児が、 ϕ 素性一致に関して、それを欠く日本語のような値をもつことがあるとすれば、2歳ごろ、英語を母語とする幼児も、例えば、スクランプリング文を発話することを予測する。

実際、その予測は正しい可能性がある。1960年代から、英語を母語とする幼児の発話には以下のような OV あるいは OVS といった「誤った」語順があることが報告されている。その一部の例を Powers (2000) から引用しよう。

- | | | | |
|---------|-------------------|-------|----------------|
| (35) a. | Balloon throw | (OV) | (Gia 1;07) |
| b. | Kimmy kick | (OV) | (Kendall 1;10) |
| c. | doggie sew | (OV) | (Kendall 1;10) |
| d. | book read | (OV) | (Susan 1;10) |
| e. | paper write | (OV) | (Adam 2;03) |
| f. | paper find | (OV) | (Adam 2;03) |
| g. | Mommy hit Kendall | (OVS) | (Kendall 1;10) |

このとき、英語を母語とする幼児は、なぜかき混ぜ文のような語順の文を生成するのだろうか。最初、英語を獲得する幼児も、日本語のような文法格を格システムとして仮定するのだろうか。理論的にはいったん文法格を仮定した後に、抽象格のシステムに移行する可能性もあるだろう。しかし、この仮説が言語習得可能性としては考えにくいかもしれない。このとき、幼児は、意味的には名詞句と述部からなる「文」を生成することができるが、その文の内部においてどのようなラベルづけがいかになされるのかは未獲得である段階にある可能性がある。 ϕ 素性が大人とは異なる特徴を持つ随意不定詞の段階では、具体的なラベリングのシステムが未獲得であるがために、英語を母語とする幼児も、スクランプリングをすることはいけぬ理由を認めることができず、(35)のような「文」を生成する可能性があると思われる。さらに、目的語が前置した語順をもつこれらの例の多くは空項を伴うものであり、これらの例は上記の仮説に矛盾はしない。実際、Hyams (1986) の記述的事実にもみるように、空項を許さない大人の文法をもつ言語を獲得している幼児の発話にも、空項が観察される時期が存在することはよく知られている。このことは、第7章から第9章で扱う空項の有無やそれらの性質もまた、格のメカニズムに関係がある可能性を示唆している。

幼児はある段階で他の言語の特性を持つことがあるという提案によると、主

節不定詞の特徴を示すような言語が世界の言語にありうることになる。それが、日本語のようなスクランプリングを許す文法格をもつ言語であるとすれば、日本語の言語獲得研究から生成文法理論、ひいては一般言語学理論へと与える示唆の意義は深いといえるだろう。

おわりに

本章では、日本語を母語とする幼児が文法格について持つ知識に関し、これまでに行われた主な研究を概観し、言語理論に対して言語獲得から示唆するところについて論じた。

日本語とはどのような言語なのか。この問いは、日本語だけを見ても、また、大人の文法だけを見ても、十分な答えは得られない。同様に、文法格の獲得は、格助詞の発達のみを見ても、それがどのようなもので、なぜそうなのかを見出すことはできない。例えば、格の獲得については、格助詞とWH疑問文が同時期に発話にあらわれるといった大久保(1975)の観察や、他言語における(疑似)主節不定詞現象に見る格の特徴(Schütze and Wexler(1996))などに鑑みて考察してはじめて、その過程の実態と普遍性がみえてくる。

格が併合やラベリングをはじめとして、人間に生得的に与えられた母語獲得の仕組みである普遍文法と密接に結びついていることは、本書の他の章からも明らかである。そういった統語理論研究に加え、格がいつどのように獲得されるのかについて調べることによって、文法格と抽象格との根本的な相違とそれに関わる言語の特性、ひいてはその生得的な特性がより明らかにされていくことになるだろう。今後も、格と時制句、ならびに空項やWH疑問文やスクランプリングなどの移動に関する統語論と言語獲得が結びつけられた形で研究されることにより、併合とラベリングに代表される生得的な文法の存在、およびその具体的な属性が解明されていくことが期待されるのではないだろうか。

参考文献

- 荒井文雄(2006)「日本語における可能表現の習得過程」『京都産業大学論集』人文科学系列第34号, 1-23.
Berman Ruth(1988)“Word Class Distinctions in Developing Grammar,” *Categories*

- and Processes in Language Acquisition*, ed. by Yonata Levy, I. Schlesinger and Martin D. S. Braine, 45-72, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale.
Boersma, Paul and David Weenink (2009) Praat: Doing Phonetics by Computer (Version 5.1.23) (Computer Program), Retrieved October 31, 2009, from <http://www.praat.org/>
Bowerman, Melissa (1974) “Learning the Structure of Causative Verbs: A Study in the Relationship of Cognitive, Semantic, and Syntactic Development,” *Papers and Report on Child Language Development* 8, 142-178.
Bowerman, Melissa (1982) “Evaluating Competing Linguistic Models with Language Acquisition Data: Implications of Developmental Errors with Causative Verbs,” *Quaderni di Semantica* 3, 5-66.
Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.
Clancy, Patricia (1985) “The Acquisition of Japanese,” *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition Volume 1: The Data*, ed. by Dan Isaac Slobin, 373-524, Erlbaum, Hillsdale, NJ.
de Villiers, Jill G. and Peter A. de Villiers (1978) *Language Acquisition*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
Figueira, Rosa Attié (1984) “On the Development of the Expression of Causativity: A Syntactic Hypothesis,” *Journal of Child Language* 11, 109-127.
Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto and Keiko Murasugi (2009) “VP-shell Analysis for the Acquisition of Japanese Potentials,” *Nanzan Linguistics: Special Issue* 3, vol. 2. 65-102.
Gasser, Michael and Linda B. Smith (1998) “Learning Noun and Adjective Meanings: A Connectionist Account,” *Language and Cognitive Processes Special Issue: Language Acquisition and Connectionism* 13, 269-306.
Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (1993) “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations,” *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Ken Hale and Samuel Jay Keyser, 53-109, MIT Press, Cambridge, MA.
Harada, I. Kazuko (1980) “Notes on the Acquisition of the Genitive Case Particle *no* for the Seminar in Crosslinguistic Language Acquisition, Prof. D. I. Slobin,” ms., The Summer Institute of the LSA, Albuquerque, New Mexico.
橋本知子・村杉恵子(2004)「『の』であらわされる文法範疇の獲得：実証的研究」『アカデミア 文学・語学編』70, 55-87, 南山大学。
Huxley, Renira (1970) “The Development of the Correct Use of Subject Personal Pronouns in Two Children,” *Advances in Psycholinguistics*, ed. by Giovanni B. Flores d’Arcais and Willem J. M. Levelt, 141-165, North-Holland, Amsterdam.

- Hyams, Nina (1986) *Language Acquisition and the Theory of Parameters*. Dordrecht, D. Reidel.
- Kim, Young-Joo (1987) *The Acquisition of Relative Clauses in English and Korean: Development in Spontaneous Production*, Doctoral dissertation, Harvard University.
- Larson, Richard (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Mintz, Toben H. and Lila R. Gleitman (2002) "Adjectives Really Do Modify Nouns: The Incremental and Restricted Nature of Early Adjective Acquisition," *Cognition* 84, 267-293.
- Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Murasugi, Keiko (2012) "Children's 'Erroneous' Intransitives, Transitives, and Causatives and the Implications for Syntactic Theory," paper presented at NINJAL International Symposium: Valency Classes and Alternations in Japanese, NINJAL, August 4.
- 村杉恵子 (2014a) 「生成文法理論に基づく第一言語獲得」『国語研プロジェクトレビュー』 Vol. 4, No 3, 164-173, 国立国語研究所.
- 村杉恵子 (2014b) 『ことばとところ—入門 心理言語学』みみずく舎 (発行), 医学評論社 (発売), 東京.
- Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2010) "What's Acquired Later in an Agglutinative Language," *Nanzan Linguistics* 6. 47-78, Nanzan University.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004a) "Three Pieces of Acquisition Evidence for the *v*-VP Frame," *Nanzan Linguistics* 1, 1-19, Nanzan University.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004b) "Two Different Types of Overgeneration of 'no' in Japanese Noun Phrases," *Proceedings of the 4th Asian GLOW in Seoul*, ed. by Hang-Jin Yoon, 327-349, Hankook, Seoul.
- 村杉恵子・橋本知子 (2006) 「言語獲得における名詞句内での過剰生成」*KSL* 26, 12-21, 関西言語学会.
- Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto and Chisato Fuji (2007) "VP-Shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives," *Linguistics* 45.3, 615-651.
- Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) "A Trihedral Approach to the Overgeneration of No in the Acquisition of Japanese Noun Phrase," paper presented at the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawaii, November 12-14.
- 永野賢 (1960) 「幼児の言語発達—とくに助詞の「の」の習得過程について」『島田教授古希記念国文学論集』, 405-418, 関西大学国文学会.

- 野地潤家 (1973-1977) 『幼児言語の生活の実態 I ~ IV』文化評論出版, 東京.
- 大久保愛 (1967) 『幼児言葉の発達』東京堂書店, 東京.
- 大久保愛 (1975) 『幼児のことばと知恵』あゆみ出版, 東京.
- 大津由紀雄 (2002) 「言語の獲得」『言語研究入門』, 大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則(編), 179-191, 研究社, 東京.
- Phillips, Colin (1996) "Root Infinitives are Finite," *Proceedings of the 20th annual Boston University Conference on Language Development (BUCLD 20)*, ed. by Andy Stringfellow, Dalia Cahana-Amitay, Elizabeth Hughes and Andrea Zukowski, 588-599, Cascadilla Press, Somerville, MA.
- Polinsky, Maria (2005) "Word Class Distinctions in an Incomplete Grammar," *Perspectives on Language and Language Development*, ed. by Dorit D. Ravid and Hava Bat-Zeev Shyldkrodt, 419-436, Kluwer, Dordrecht.
- Powers, Susan M. (2000) "Scrambling in the Acquisition of English?" *The Acquisition of Scrambling and Cliticization*, ed. by Susan Powers and Cornelia Hamann, 95-126, Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (1993-1994) "Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root Infinitives," *Language Acquisition* 3, 371-393.
- 斎藤衛 (2013) 「日本語文法を特徴づけるパラメーター再考」『言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約: 日本語獲得に基づく実証的研究 成果報告書 II』, 1-30, 国立国語研究所.
- Saito, Mamoru (2016) "(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without ϕ -feature Agreement," *Linguistic Review*, 33.1, 129-176.
- Sano, Tetsuya (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*, Doctoral dissertation, UCLA.
- Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) "A Theoretical Account for the 'Erroneous' Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense," *BUCLD 34 Proceedings Supplement*. http://www.bu.edu/linguistics/BU-CLD/Supp34/Sawada_Naoko.pdf
- Schütze Carson, T. and Ken Wexler (1996) "Subject Case Licensing and English Root Infinitives," *BUCLD 20*, ed. by Andy Stringfellow, Dalia Cahana-Amitay, Elizabeth Hughes and Andrea Zukowski, 670-681, Cascadilla Press, Somerville, MA.
- 渋谷勝己 (1994) 「幼児の可能表現の獲得」『無差』創刊号, 23-40, 京都外国語大学日本語学科.
- Yano, Keiko (2007) "The Structure of the Japanese Potential (*Reru*) Construction: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition," *Nanzan Linguistics: Special Issue* 3, vol. 1. 331-351.
- 横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」『発達心理学研究』1, 2-9.